

ほっかいどう NIE 通信

Newspaper in Education



発行 北海道 NIE 推進協議会 〒060-8711 札幌市中央区大通東4丁目1 北海道新聞社内 ☎011-210-5802 FAX011-210-5826

北海道新聞 NIE ホームページ (<https://nie.hokkaido-np.co.jp/>) でバックナンバーを閲覧できます

いっしょに読もう新聞コン

鶴川さん(札幌中) 全国優秀賞

新聞を読んで家族や友人らと話し合い、意見を応募する「第15回いっしょに読もう新聞コンクール」(日本新聞協会主催)で、札幌市立向陵中1年の鶴川真千子さん(12)が、道内の個人では最高となる優秀賞を受賞した。エゾシカの駆除と食材としての活用に関する記事を取り上げた鶴川さんは「とてもうれしい。エゾシカの命が無駄にならないような世の中になれば」と願う。

エゾシカ肉活用訴え

コンクールは小中高生と高専生が対象。2023年9月からの1年間に発行された新聞を読んで作文に取り組んだ。応募総数は全国で6万1576編。このうち中学生は全国から2万5903編、道内から133編の応募があった。鶴川さんは「身近な題材を取り上げては」という父母からの助言を受けて「エ



ゾシカ肉 家庭の新食材に」(北海道新聞6月30日朝刊)の記事を選択した。「エゾシカはかわいいというイメージ。でも『害獣』という言葉が目に入って、きちんと読んでみようと思

った」。農業被害が年間48億円に上ることに驚き、食用にも供されていることを知った。エゾシカ肉の活用について考えようと、実際に家族でシカ肉を買いに行ったという。精肉店で入手し、食

偽情報見抜くには!

函教大・野崎講師ら発表

第9回「大学のNIEを考える会」(北海道NIE推進協議会主催)が2月5日、札幌市中央区の北海道新聞社で開かれ、大学やメディア関係者ら約20人が、教育現場での新聞活用の現状を語り合ったII写真II。北星学園大の阪井宏教授が座長を務め、2016年設立の同会は、大学におけるNIE実践について交流している。この日は、北海道教育大函館校の野崎雄太講師が「新聞を活用したメディアリテラシーの育成」と題し、函館市立南茅部中と上越市立中郷中の3年生で実施した授業交流について発表。研究は上越教育大の研究プロジェクトの助成を受け、同大の中平一義教授と共同で行った。

品関連の会社に勤める父の料理で味わった。「食材としての利用は命が無駄にならないから素晴らしいと思った。父はさらに、トレーニング用の食料やサプリメントへの活用など、シカ肉の栄養成分に着目した工夫をしては話してくれた」。自分では気づかなかつた視点を加え「シカ肉の良さが伝わり、エゾシカが害獣と呼ばれることが減ったらい」とまとめた。応募は、通っている学習塾の作文講座から。優秀賞

に選ばれ「驚きが一番大きい。こうした賞は初めてですごくうれしい」と笑顔を見せる。今後、エゾシカ肉の活用が広がった際には「その状況も知りたいと思います」。普段、新聞を読むことは多くないそうだが「ニュースを知らないやならぬし、知るべきだと思う」とも話した。中学の科目では数学が得意。将来は「好きな赤ちゃんと関わる仕事に就きたい」という夢を口に



生徒たちはそれぞれ、防災をテーマに新聞づくりを学び、地域の紹介を織り込んだ新聞を実際に製作。記事中に1カ所、フェイクニュース(偽情報)を入れて完成させた新聞を、互いに

交換して読み合い、オンラインで質問や意見を交わしたことを紹介した。会場からは「フェイクニュースを作った生徒の反応は」などの質問も。学習効果の分析は今後行すが、野崎講師は「情報の取捨選択やフェイク記事の見極めなどに、新聞というメディアが十分有効に働くと感じた」とまとめた。北海道新聞みらい教育推進室の中井理依室次長は、学校での出前授業経験を踏まえ、教師の新聞活用策について話した。昨春秋に大阪で開かれた日本NIE学会での発表を元に「新聞は、効率良くパランスの取れた情報を収集できる」メディアであると説明。検索でも、的確にキーワードを選ぶことでフェイクニュースを遠ざけることができるとし、紙の新聞とデジタルの適切な使い分けを紹介した。

昨秋から5地区でセミナー

NIEに取り組み教員らが新聞を使った授業の工夫を学び、情報交換などを行うNIEセミナーは、2024年7月に札幌で開かれた後、9月から空知(岩見沢市)、日胆(伊達市)、上川(旭川市)、根室(別海町)、十勝(豊頃町)の各地区でも順次開かれた。参加者は興味深い授業公開や実践発表、その後の研究討議、指導主事による助言を通じてNIEの重要性を再確認していた。

まわしよみ新聞 作って意見交換 岩見沢中央小

第16回空知地区セミナーは9月3日、岩見沢中央小で開かれた。同小の北島桂子教諭と山本愁教諭が「地域とともにまわしよみ新聞制作活動」と題した6年生の授業を公開。児童62人が、気になった記事などを切り抜き、選んだ理由を発表し合う「まわしよみ新聞」に取り組んだII写真II。



空知管内の教員ら約20人が見守る中、児童は4、5人のグループに分かれて当日の新聞から、岩見沢のねぶた祭りやナラ枯れの原因、虫飛来などの記事のほか、広告や四コマ漫画を切り抜き、

横造紙に貼り付けてまわしよみ新聞を仕上げた。恐竜の記事を選んだ児童は「家族で福井に旅行し、恐竜の博物館を見たので興味を持った。北海道にもたくさん恐竜がいたことが分かった」と、自分の体験も交え話していた。この日の学習は児童による「炭鉄港新聞」作り役立てる。参加教員による研究討議では「児童たちの意見交換の時間をもっとあれば良かった」などの意見が出されていた。

批評文の書き方 記事読んで学ぶ 伊達・光陵中

伊達市立光陵中で10月3日に開かれた第18回日胆地区セミナーには、道内の教員ら20人が参加した。同中の藤田佳嗣教諭は「多角的に分析して書くよう説得力のある批評文を書く」と題して、3年生国語科の授業を公開したII写真II。



1の3点に着目しながら、記事の意図や意味について自ら問いを立てて分析し、その問いへの答えをグループ内で発表した。授業公開後の研究討議では、出席者から「新聞記事

人口が偏る背景 記事使い考える 旭川・明星中

第23回上川地区セミナーは北海道新聞旭川支社からのオンラインで11月28日に開かれたII写真II。上川管内の教員ら約50人が参加し、新聞記事を授業に活用する実践例を学んだ。

旭川市立明星中の夏井一哉教諭は、中国・四国地方の人口の偏りをテーマに、事前収録した2年生社会科の授業映像を公開。広島・愛媛両県を結ぶ「瀬戸内しまなみ海道」の開通などについて取り上げた新聞記事を示し、交通網の充実で人口が移動した可能性や、渋滞といった課題が生じたことを説明した。新聞を活用して地域課題について考える富良野高の



取り組みも紹介された。独自科目「北海道学」で、1年を通して新聞を使っている北村智裕教諭が、新聞を読んで課題を把握し、生徒が内容をさらに詳しく調べたりしていることなどを説明。授業の例として、富良野市を訪れる観光客数に関する記事を基に、オーバーツーリズム(観光公害)について生徒と解決策を考えたいことなどを挙げた。

豊頃小 読みたくさせる見出しを考えよう



第35回北海道十勝新聞教育研究大会兼第23回十勝地区セミナーは12月13日、豊頃町の豊頃小で開かれ、同年11年生がモルモットの飼

育で感じたことを、新聞製作用を通して表現する生活科の授業が公開された。旭川市旭山動物園から昨年11・12月に借りたモルモ

注目記事を選び 理由や感想発表 別海・野付小、野付中

別海町立野付中で12月2日に開かれた第4回根室地区セミナーでは、同中2年生と野付小5年生による公開授業や両校教諭の実践発表などが行われた。

小中学校教諭ら約20人が参加。午前中の公開授業では児童生徒計32人が6班に分かれ、新聞の注目記事を切り抜いて横造紙に貼り、選んだ理由や感想などを発表したII写真II。

午後からの実践発表で野付小の千葉遥教諭は「数社の新聞を読み比べでできるようになっている」と新聞活用の取り組みを紹介。野付中の五十部敏幸教諭は「読解」と活発な意見が出され、藤田教諭は「難しい文章を読むことに慣れていない生徒が多いが、頑張ってやってくれた」と話していた。



参加者からは「新聞は教材として活用範囲が広いテキスト」「新聞を通じ批判的な見方を養えるようにしたい」といった意見などが出た。

完成した新聞は、多くの来園者からの感想をもらえるように、今年1月から4月上旬まで、旭山動物園こども牧場で貼り出されている。

メディアアリテラシー どう育成

新聞協会教育フォーラム

朝倉教授(札幌国際大)ら論議

「学校教育におけるメディアリテラシー」をテーマに、日本新聞協会の第8回NIE教育フォーラムが3月1日、同協会札幌会場でオンライン形式で開かれた。言や札幌国際大の朝倉一民教授ら3人が提言の育成について考えた。



日本新聞協会の教育フォーラムで話す札幌国際大の朝倉一民教授

小学校教諭として長年NIE活動に取り組んだ朝倉さんは、子どもたちが情報を活用するため身につけるべき力を学習指導要領に即して「スキル(知識・技能)」「リテラシー(思考力・判断力・表現力)」「デジタルシブシンシップ(学びに向かう力・人間性)」の三つに分類した。

その上で新聞社の記事から交流サイト(SNS)まで、信ぴょう性や速報性の違う多様なニュースを並列して見ることができているのがインターネットであり、この仕組みを理解させることが大事だと強調。安倍晋三元首相の国葬や死刑制度を例に各紙を読み比べ「伝える側にも意図があるという

ことが善」とされる時代に、もう一度、正しいことが善であることを見直させる教育が大切」と訴えた。

後半部では3人が意見を交わした。ネットについて朝倉さんは「さまざまな発信自体が悪いわけではない。情報の受け手側が、どこまで信頼性ある情報なのか考えていくことが大事」と指摘。ファクトチェックの力を身につけるため「学校では、朝の時間に新聞記

児童が記事まとめ 文章力向上図る

アドバイザー研修会で報告

NIEの普及に力を注ぐ日本新聞協会認定のNIEアドバイザーが、道内各地での2024年度の活動を報告し合うアドバイザー研修会(北海道NIE推進協議会主催)が1月25日、札幌市中央区の北海道新聞本社で開かれた。写真。昨年



道内各地のNIEの普及に力を注ぐ日本新聞協会認定のNIEアドバイザーが、道内各地での2024年度の活動を報告し合うアドバイザー研修会(北海道NIE推進協議会主催)が1月25日、札幌市中央区の北海道新聞本社で開かれた。写真。昨年

事を題材に話し合う『NIEタイム』のような取り組みを継続していくことが重要だ」とした。

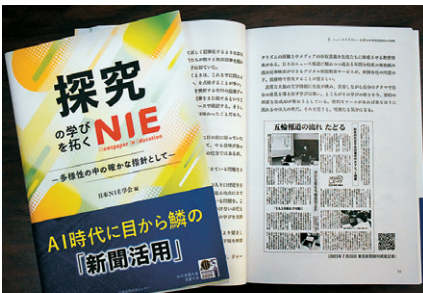
子ども向けの新聞に携わった経験から梶田さんは「子どもたちが、ネットの中の都合の良い情報だけを得て知識を形作る前に、正しい知識を伝えることに意味がある」と訴えた。これを受けて関口さんは「いろんな記事が載っている新聞に近いのが図書館。子どもたちには学校図書館にもっと足をむけてほしい」と話した。

探究の学び実現へ 中高の実践例紹介

NIE学会が出版

新聞を用いた教育活動の発展を目指す教員や研究者、メディア関係者らで作る日本NIE学会は「探究の学びを拓くNIE」多様な性の中の確かな指針として「写真」を出版した。

中学校と高校での国語科と社会科の授業のほか、教科外での実践など全11テーマを掲載。教員や研究者が各自



の取り組みについて、別の研究者と新聞社員らメディア関係者がそれぞれ論評を寄せている。

弘前大教育学部の池田泰弘准教授(元釧路市立景雲中教諭)は「社会参画の基盤を形成する中学校社会科の実践」と題して、新聞を使った地理「関東地方」と歴史「戦後の世界と日本」の授業事例を記述した。北海道新聞社みらい教育推進室の中井理依室次長は、この授業内容への論評に続いて「多様な視点・意見と子どもが出合う方法」として、新聞各社の学校向け新聞記事データベースの活用を提唱。「記事の活用が劇的に増える可能性がある」と指摘した。

このほか、ニュースリテラシーの育成やICTの活用、生徒会活動と結びつけた実践など、興味深い論考もある。

昨年8月に京都新聞出版センターが発行。A5判258ページで定価1980円。

発言もあった。

千歳市で行われた小学校2校と中学校1校の授業交流で、NIE授業を行った際には、タブレット端末の情報共有システム「グループクラスルーム」に授業の流れをまとめたシートと使った新聞記事を共有。他の教員らに対し、新聞を活用した授業の可能性を示すことができたという。

一方、「親子で参加するNIE教室というようなミニナーを開けないか」という意見も出た。北海道NIE推進協議会が、教員と新聞関係者を対象に道内各地で開催してきた地区セミナーとは別に、教育に関心のある保護者をターゲットとし、新聞販売店の方々にも参加してもらって、NIEの実践を体験してもらおうという催しだ。NIE活動の裾野拡大に向けた提案として、参加者の関心を集めていた。

「知りたい」に答える戦争報道

毎日新聞北海道社会部長 安高 晋

高校生の興味アンケート



連載「みんなと知る戦争」終了後、高校生から寄せられた感想をまとめた特集面。「狂気にぞっとした」「教科書に書かれている事実の向こう側を学べた」といった思いがつつられていた

苦渋の選択だったことは容易に想像できた。今年3月末の解散を決めた「北海道被爆者協会」のことだ。遺品の展示や語り部活動を続けてきたが、高齢化が進み、戦後80年の節目を前にして活動に終止符を打つことになった。

若い世代に戦争の記憶を伝え、悲惨さや平和の尊さを考えてもらう。それはメディアの存在意義の一つでもある。一方、閲覧数を可視化できる今、こうした記事がウェブで読まれないという現実も見えてきた。一昨年、東京社会部のデスクとして夏の平和企画を担当することになり、どうすれば若い世代に届く

かを模索した。終戦の日前後に各社が連載を展開する平和企画はこれまで、記者の側が「今年これを読んでほしい」とテーマを設定してきたように思う。そこで今回は、若い世代が「知りたい」という話を掘り下げることで関心を持ってもらえないかと考えていた。年配の世代には知られていても、最近の世代には目新しく映るエピソードを集め、どの話を深く知りたいかと尋ねるアンケートを全国の高校生に実施した。対象校選びは、日本新聞協会のNIE担当や東京都NIE推進協議会に協力してもらった。NIEアドバイザー在籍校など全国6校



①甲子園の沖縄代表の応援歌として有名な「ハイサイおじさん」。作曲の背景には、県民の4分の1が死んだ沖縄戦の悲劇がある
②戦争から戻っても長年、心の病気に苦しんだ元兵士たちがいた
③戦争で親を失った「戦争孤児」が12万人以上いて、行き場がない子は駅などで寝泊まりして生き延びた
④日本で韓流に触れられる「コリアンタウン」の原型は、戦後の物不足のためにできた闇市だった
読みたいものをも一つ選んでもらった結果は①558票②513票③419票④316票。そこで、①にまつわる人や現場を改めて訪ね、記事にした。【戦地】「戦争の始まり」の各カテ



北海道・東北ブロックNIEアドバイザー・NIE推進協議会事務局長会議が9月28日、岩手県盛岡市の岩手日報で開かれたII写真24人が参加。「主権者教育

編集後記

○…上越教育大の中平一義教授と共同で行った研究プロジェクトについて、北海道教育大函館校の野崎雄太講師から「大学のNIEを考えた会」で報告いただいた。生徒が仕上げた新聞記事の1カ所にフェイクニュースを入れた点が興味深い。悪意の偽情報、単純ミスの情報など、普段接している情報の中には正しくないものもあり得る。肌感覚で分かったのではなからぬか。日本新聞協会の教育フォーラム「学校教育におけるメディアリテラシー」がテーマだった。中学生のメディアリテラシー育成に、新聞はどこまで役立つのだろうか。野崎講師による研究の詳しい分析結果は、今後まとめられるのか、今から楽しみだ。

に新聞をどう生かすか」をテーマに各地の現状や対応策などについて熱心に意見交換した。道内からはNIEアドバイザーを務める札幌国際大の朝倉一民教授と、道NIE推進協議会の福元久幸事務局長が出席。アドバイザ

ゴリーでも同様の手順を踏み、計5回の連載「みんなと知る戦争」にまとめた。結果や反響は興味深かった。【戦争の終結】には「ウクライナにも、捕虜となった日本の兵士を強制的に住ませる収容所があった」という選択肢があったが、得票数は最も低かった。現在の国際情勢とも絡むので、記者の感覚で選ぶなら記事にしていたと思う。【戦地】では「戦闘機で体当たりするほかに、必ず命を失う任務があった」が最多得票となり、海中の特攻「回天」にまつわる物語を記事にした。年配とみられる人から「こんなこと誰でも知ってる」とコメントが付いた一

方、若い世代からは「20年生きてきて、全く知らなかった」と反応があった。連載後、東京都立青山高校の生徒に感想を寄せてもらった。「戦時中の人も、生きたい気持ちは同じだった。私にも知った責任がある」。多くの真摯な感想に触れ、若い世代は過去の戦争に無関心なのではなく、知るきっかけが少ないだけなのだと思われた。

続いて日本新聞協会の関口修司NIEコーディネーターが、主権者教育について基調提言を行い、教員は自らの支持政党を明らかにしてはならないことや、異なる見解を持つ複数の新聞を活用して授業することの重要性などを強調した。グループ討議を行った参加者からは「家庭での主権者教育のため、教員は児童生徒に家庭で取り上げる話題を提供するべきだ」「市町村の首長や議員の選挙に合わせて公約を読んだり、地域の問題を考えさせたり、市役所建て替えを巡る賛否の記事を使って地域の実情を理解させることも主権者教育と言える」などの声を紹介していた。